アートペーパー115
ART PAPER 名古屋市美術館ニュース 2020年冬号
Nagoya City Art Museum

特集 feature article

芥川賞作家、冨澤有爲男（とみざわういお）の画業

画家になった文学少年

2019年、冨澤有爲男の絵画が１点、名古屋市美術館に寄贈されました。この《[風景]》は、すでに収蔵されている《姉》につづいて、当館にとって２点目の冨澤作品になります。作者の冨澤は、1937年２月に第４回芥川賞を受賞した小説家として、文学界で名を残した人物です。小説家が手がけた絵画、と聞くと趣味の範囲のものかと想像されるかもしれませんが、実のところ冨澤には大正、昭和の帝国美術院展覧会（帝展）に３度入選を果たすほどの力量がありました。名古屋洋画壇とは浅からぬ縁があり、一時は画家としての前途のほうが有望視されていたのです。

もともと冨澤は中学生の時から文学者を志望していました。1902年、冨澤は大分県大分市に生まれ、1912年か1913年に名古屋に転居しました。『富沢有為男選集』（集団形星、1970年）巻末に収録の「富沢有為男 年譜」によると、卒業したのは葵小学校で、その後東海中学校に入学しました。冨澤自身が執筆した「略自伝」（『鷲の巣』第２巻第１号、1926年）によると、中学３年生の頃にはすっかり文学少年になっており、中学４年生の時には手当たり次第に本を読んで、オスカー・ワイルドや志賀直哉、佐藤春夫らの著作に熱中していたそうです。

おそらく1918年の春、冨澤はどういうわけか東京商船学校に入ろうとしましたが、体格に難ありという理由で入学は叶いませんでした。進路については興味深いエピソードがあります。あくまで文学の道を志すと主張する有爲男に対し父親が猛反対、見かねた母親が一層のこと絵画ならどうか、と妥協案を提出したというのです（富沢有為男「美女節子」『華麗』２号、1961年）。有爲男の母親には、芸術で身を立てている従兄がいました。洋画家の岡田三郎助です。

冨澤有爲男《[風景]》1929－30年頃　名古屋市美術館蔵

冨澤有爲男《曇り日》1928年　林の中の小さな図書館蔵

冨澤有爲男《パリ・サンミッシェル橋》1929年　広野町蔵

冨澤は東京で岡田三郎助に弟子入りし、東京美術学校にも学籍を置きました。ただし、もともと画家修行には乗り気でなかったため、多くは上野図書館に通って日々を過ごしていました。それでも、1918年の秋には能勢亀太郎、宮川教助、木下秀一郎といった画家たちと「土塊社（つちくれしゃ）」というグループを組織して、その第１回展を12月に名古屋で開催しています。土塊社は1921年10月までに３回の展覧会を名古屋で開き、まだ洋画団体展が少なかった中京画壇に大きな刺激を与えていたとみられます（『新愛知』1918年12月６日朝刊、12月７日朝刊、1921年10月12日朝刊、1922年10月11日朝刊）。これを機に冨澤はそのまま名古屋に居すわり、新愛知の文芸絵画部の記者になりました（なお、2018年に東海中学校・高等学校同窓会が発行した『同窓会名簿』には、大正８［1919］年３月卒業生として「富沢有為男」の名前が記載されています）。新愛知を６か月余りで辞めると、今度は日本画修行のために京都に行きます。京都では土田麦僊に教えを請いますが、わずか３日で嫌になってしまい名古屋へ戻ってきました（「略自伝」）。

おそらく1921年の春、冨澤は再び東京に出て、あらためて岡田三郎助に絵画の教えを請います。また、小説も執筆しており、岡田夫人の八千代（小山内薫の妹）から文学の指導も受けていました。同年秋の第３回帝展には何らかの作品を出品しており、予選は通過したものの入選には至らなかったことが『新愛知』（1921年10月12日朝刊）に報じられています。そして1922年秋の第４回帝展に《白晝夢林》を出品して初入選を果たすのです。

以上が、冨澤が画家として洋画界に登場するまでのおおまかな経緯です。なお、冨澤の生涯については、三田聰子氏による「若き日の富澤有為男」（『名古屋近代文学史研究』、2006－2010年）と題した重要な先行研究があります。拙稿を執筆するにあたっても、こちらを大いに参照させていただきました。また、名前の表記は、ご遺族からのご教示により、文献名や引用文を除いて「冨澤有爲男」に統一しています。

知られざる画業

1945年５月25日、当時冨澤が住んでいた東京の牛込天神町の自宅が空襲で焼失しました。そのため現存する冨澤の絵画はきわめて少ないと予想できます。冨澤は帝展に３度入選していますが、それらの作品の行方も不明です。帝展入選作品の絵柄は『日展史』（６－８巻、社団法人日展、1982年）などで確認できるものの、掲載図版は白黒であり、巧みな配色と細やかな筆致を個性としていたであろう冨澤の絵画の本質を知るには至りません。第４回入選の《白晝夢林》については、仙丈（田中仙丈か）による「帝展の印象（７）」（『名古屋新聞』1922年10月25日朝刊）に作品評があります。「作品には成功しているが、蔭に潜んだ作者の個性が妙に不純に思われて、私としては取りたくなかった」と不評ですが、「殆ど日本画である材料を、恐らく大家でも怖ろしくて手を付けまいと思う程の題材を、無造作に手をつけた勇気には感心せざるを得ない、それと、水彩の絵画であれだけの厚味を見せた事も手柄である」という興味深い記述をしています。一方で、吉田紅象は「帝展の洋画一瞥」（『新愛知』1922年10月31日朝刊）の中で、「氏の趣味性の特異を證する作品として一顧の価値がある」と評価しています。なお、息子の初入選に際して取材を受けた冨澤の父は、「先年［1921年］は尺五

美術館そして私―80年代からミレニアムへ

私の絵画へ

美術家　山本富章

３号前の「112号」で触れた1983年作の版画は美術館に収蔵された初めての作品であるが、試刷の時アクアチントの腐蝕が深いため通常のインクはプレスを通すとはみ出てしまった。東京藝大の中林忠良先生に手ほどきを受けた焼き油を使って顔料のダイヤモンドブラックを手練りし、さらに三本ローラーミルを使って練上げた顔料濃度の高い粘り気の強い硬いインクを使うことで作品となった。５枚つなぎの１点分を刷り上げるのに３時間近くかかった。使用した高知NB版画用紙は中林先生が高知の紙料研究所と共同開発したもので、雁皮（がんぴ）を表皮とすることで微細な印刷を可能にするものであった。雁皮は日本の紙幣に採用され、その印刷適性と丈夫さから一万円札には最も多く配合されているという。

表現を支えるものは素材であり、それに向き合う姿勢無くして自立する作品は生まれない。そのことは確信に近いものになりつつあった。刷り師をしながら絵画表現を模索していた私は70年代後半からアクリル絵具を使うようになっていた。基底材を合板にしたことから様々なものを接着するミクストメディアの可能性はさらにひろがり、流動性を与えた絵具をボウルに用意して綿布を漬け込み、パネル上で皺（しわ）もろとも押し広げアーチ状の形態にしたり、版画で使い慣れた銅板や亜鉛板なども基底材として使ったりしていた。

画面上の凹凸が増すにつれ、その物性に負けない色彩強度や作画の独自性が必要であった。デカルコマニーで現れた色面のすき間を反対色の点描で埋めていくことから始まった色斑はまだ脆弱なものでしかなく、私のドットとなるためにはベースに繰り返し塗られた色面に負けない物質的強度が必要であり、厚みのある絵具にすべくメディウムを追加してみても限界があった。大量にアクリル絵具を使っていたことからメーカーの技術者が制作現場である大学に足を運んでくれ、アトリエの壁際に積み上がった空容器の量に驚きながら私が抱えている問題点はないかと尋ねられた。立てかけたままでも垂れ下がることがなくそのまま乾燥し、固化しても１cm位になる絵具がほしいと伝えると、それくらいならば硬さの調製で可能だからと赤と緑の試作品を送ってくれた。使ってみるとまさにこれだという絵具であったが、少し柔らかくしようと水を混ぜると泡立ちが消えなかったことからこの限定的な用途の絵具を大量に発注することはできなかった。脱泡することがポイントだと聞いていたので、メディウムを追加したアクリル絵具を冒頭のローラーミルにかけ絵具の中に残っていた空気を追い出してみると、立てかけた画面に押し付けた絵具は滑り落ちることなくそのまま乾燥してくれることが判った。試行錯誤しながら自ら調整可能なアクリル絵具にたどり着くことができ80年代後半から展覧会では可能な限り大作を並べることに集中した。しかしその原点が小さな版画にあったことにはまだ気づいていなかった。

版画インクふき取り中の筆者（1980年代後半）

時の話題

早くも一年を振り返る時期が巡ってきました。今年はやはり、「新型コロナウイルスの感染拡大」により、生活様式が一変したことに尽きるのでしょう。今年2020年が将来に向けての分岐点になったことは想像に難くなく、大阪都構想の挫折やアメリカ大統領選挙、さらには話題にも上らなかった10月末恒例の「仮装行列」の状況を見ていると、次代に対して人々は、「期待」よりも「不安」を感じ、どこか保守的になっているようにも思えます。そうした気分を象徴する出来事として、今回のアメリカ大統領選挙ほど、分断された互いの思惑が衝突した出来事も珍しいのではないでしょうか？

これまでアメリカでは、大統領の任期が終了すると、在任期間中の社会の動向を検証、回顧する現代美術の展覧会が企画されたりもしました。例えば、「ロナルド・レーガンの時代」や、インター・ネットの整備と普及を目指した「スーパー・ハイウェイ構想」等、「90年代」や「ゼロ年代」といったディケード＝10年ではなく、大統領の任期期間によって、“時代精神”を分析しようとする背景には、政策に対する批判や評価を作品に取り込む、現代美術の手法の特質があると言えます。国内外で（大いに）批判されたトランプ大統領に関しては、今後もその話題に事欠くことはないでしょう。

例えば、アメリカと隣接するメキシコにとって、この４年間のアメリカ大統領とは、（あまり）好ましい存在ではなかったようです。本紙107号でも紹介しましたが、アメリカで大統領選が行われたまさにその時期に毎年行われるメキシコの国民的行事「死者の日」に於いて、爆竹を括り付けられ、街頭に吊るされ、燃やされる人形のモデル＝「ユダ」としてのトランプ大統領には絶大な人気があったそうです。そうした笑い飛ばして済ます方法とは別に、現状を深く考え、分断された溝を埋めようとする表現もあります。

メキシコ人の現代美術作家ボスコ・ソディ（1970年生まれ）は、メキシコの土と水と砂によって制作し素焼きしたレンガを組み上げ、強固な壁を制作します。巨大な壁は、言わずと知れた国境や、民族間の隔たりや、差別を象徴するものですが、煉瓦を積み上げ、壁を築いた参加者はその後、その壁を少しずつ取り崩し、煉瓦を持ち帰ることを薦められます。観客参加型のワークショップによって、いかなる障害も人々の連帯と協働で取り払われることを示そうとする発想は、人々に「勇気」と「希望」を与え、それこそがこれからの世界には必要でしょう。（J.T.）

の絹本三幅を出して白札迄漕ぎ寄せて惜しくも落選の憂き目を見ました」（『新愛知』1922年10月11日朝刊）と話しています。だとすると第３回帝展に落選した作品は日本画か、それに近い作品であった可能性があります。冨澤は以前にも、国展の鑑査に《宵靄月光讃》と題する日本画を出品していたようです（『新愛知』1919年10月26日朝刊）。

1923年１月、中央洋画会第２回展覧会に《鶏卵図》が入選します（『新愛知』1923年１月22日朝刊）。「略自伝」によれば、冨澤は1924年の第５回帝展に《秋風十九谷山》という作品を、1925年の第６回帝展に再び《秋風十九谷山》と《白獅子》を出品していますが、いずれも落選しました（第５回帝展では第一鑑査を通過していたことが『名古屋新聞』1924年10月10日夕刊に報じられています）。1926年の第７回帝展には《遠雷》で入選、この作品は埼玉県で描かれた風景画で、「極めて明るい点描的な筆致と、強烈な、色調とを持った愉快な作品である。従来好んでつくった象徴的な傾向から抜けて、写実味の加わった意味において富澤氏のものとしては、珍しい作品といわれている」と評されています（『名古屋新聞』1926年10月14日朝刊）。つづいて1927年の第８回には《妹達》が入選します。『名古屋新聞』（1927年10月30日朝刊）の「秋期美術漫談（５）」で、評者Ｂは冨澤について「氏は氏自身を持たぬ。傑れている誰かを下手にまねる」と酷評していますが、これに対し評者Ａは「おれは富澤氏をよく知らない。けれども、今年の物などは相当買ってもよいじゃないかと思う」と反論しています。

1927年の春、冨澤は名古屋の若い洋画家達が組織していたグループ「サンサシオン」の新会員になります。その入会理由は「この会の『友情』に動かされ、これらのよき友達にひかれた結果」であると語っています（『名古屋新聞』1928年４月16日朝刊）。その「友達」のひとりでサンサシオンの創立同人である鬼頭鍋三郎は、1924年の第５回帝展に初入選した際の『名古屋新聞』（1924年10月11日朝刊）の取材に対し、自分はほとんど独学だが、「師としては冨澤有爲男氏水野義正氏位でそれも最近の事です」と話しており、土塊社の同人

冨澤有爲男　写真：広野町蔵

２人を慕っていたことがわかります。1928年４月の第５回サンサシオン展覧会に冨澤は《秋山図》、《佐藤春夫と私》を含めた４点を会員として初出品、1929年５月はフランスに滞在中でしたが、第６回展に《姉》（名古屋市美術館所蔵）を出品、1930年５－６月の第７回展にはカーニュから《ミモザの花》、《ルノワールの家》を含む７点を送って出品しました（『新愛知』1928年４月17日朝刊、『名古屋新聞』1929年５月６日朝刊、1930年５月22日朝刊、５月26日朝刊）。

冨澤の絵画のうち、現在一般に公開されている作品はごくわずかです。大分県竹田市、長湯温泉にある宿泊施設Ｂ・Ｂ・Ｃ長湯に併設された「林の中の小さな図書館」には、冨澤の油彩画《曇り日》があります。画面右下の年記によれば1928年の作品で、画面の上半分を曇り空が占め、下半分に草木の茂みと丘の上に立ち並ぶ家々が描かれています。空の灰色の調子にあわせて彩度を落とした色使いが特徴で、家の壁などに用いられた赤茶色と水色が控えめながら効果的なアクセントになっています。曇りの風景ですが重苦しい印象はなく、穏やかな空気と風のそよぎが感じられる作品です。この作品が「林の中の小さな図書館」に収められた経緯は2008年７月10日夕刊の『大分合同新聞』で紹介されています。

また、戦時中の疎開先で、その後も引き続き冨澤が居住した福島県広野町にある広野町役場図書室には、油彩画《パリ・サンミッシェル橋》が展示されています。画面右下に「St michel / pont neuf / Ouio T. / 1929 4」の書き込みがあり、1929年２月上旬に日本を発った冨澤が、パリに到着して間もない頃に描いた作品と推定できます。1929年５月10日朝刊の『名古屋新聞』に掲載された「続異国の旅（１）在パリ 冨澤有爲男」の中で、冨澤は滞在中のホテルから、セーヌ川をはさんで向かいにノートルダム大聖堂が見え、左手にはポンヌフ橋越しにルーヴルの一画が見えると記しています（５月18日朝刊の記事では、Hotel Suède 15 quai St Michel が現住所だと書いています）。《パリ・サンミッシェル橋》は、滞在中のホテルまたはその付近から眺めた光景を描いたものでしょう。

ふたたび文学の道へ

出発前、冨澤は「私は勉強して帰ってきますよ、小説は書きませんよ、絵は描きますよ、それに今度は上等の挿絵も習って参りますよ」と旅の目的を語っていました（『名古屋新聞』1929年１月13日朝刊）。滞仏２年目の夏、『名古屋新聞』（1930年８月１日朝刊、８月２日朝刊）に寄稿した「フランスだより」では、半年以上かけて１枚の大作を仕上げようと苦心している現状を報告しています。「だんだん仕事が本調子にはいって来ますと、今更に自分の才能の貧しさを知ります（…）しかし今日となった上は今さら絵を止めるということもできませんし、せめて負けん気だけでつっかかってやろうと存じます。さて、ともかくこの唯今の大作が終わったら一応日本に帰る気ではいます。日本でやりたい仕事の順序もほぼ定めていますし、ここ２、３年中には必ず一通りのものを発表致します。」

冨澤は1930年11月10日にパリを発ち、シベリア経由で帰朝、11月26日、約２年ぶりに父母の住む名古屋を訪れました。（『名古屋新聞』1930年11月27日夕刊）。しかし帰国後、冨澤が帝展をはじめとする有力な公募展に新作を出品したという記録は、今のところ見つかっていません。絵画制作から離れていった明確な理由も不明なままです。帰国の翌年、冨澤は画家の水谷清と共に台湾を旅行しました。帰国の途は別々でしたが、冨澤は途中沖縄に寄って、後に代表作となる小説「白い壁画」のヒントと資料を得たのだと水谷は語っています（『ぶらい』第33号、1970年）。主人公である可奈子の兄は鹿島龍三という名の画家であり、「白い壁画」という題名はその鹿島が描く作品にちなんでいます。作中にはフジタやシャガール、ローランサンといった芸術家たちの名前がたびたび登場し、カーニュ滞在中に冨澤が見たであろうルノワールの画室についての言及もあります。「白い壁画」は、冨澤の画家としての知識と旅によって得られた知見が随所に活かされた作品という印象を受けます。芥川賞を受賞した小説「地中海」もまた、主人公は画家、舞台はパリと南仏で、まさに冨澤のフランス滞在の経験から生まれたといえる作品でした。たとえば次のような文章には、いかにも画家らしい感性が働いているといえないでしょうか。「一時間程も前に、山王の森から清水谷公園の方へ過ぎていった晩夏の通り雨は、そのまま見附かいわいの風物に、目のさめる様な緑のヴェールをかけて、葉桜を縫う燕の姿、濠の水にたわむれる白鳥の趣にも、一つとして心をときめかさぬ物とてなかった。もはや、ツアイライトに近い赤坂離宮の上に、細長く横たわった金緑色の空の隙間を見ていると、山また山を越えた遙か彼方の温かい海をさえ想像させられる」（富沢有為男「白い壁画」『富沢有為男選集』）。（nori）

展覧会の舞台裏

コロナと美術館　その２

このコーナー、一体いつから始めたのだろうと調べてみたら、2001年春号（第49号）からでした。この春号からアートペーパーのデザインが一新され、それと同時に「展覧会の舞台裏」が新たなコーナーとして設けられたのですが、それからちょうど20年、今回で66回目の連載となりました。2001年というと、９月11日にアメリカで同時多発テロが起こった年で、ニューヨークの世界貿易センタービルに２機の旅客機がぶつかっていく映像は、今も多くの人々の記憶に鮮明に残っていることでしょう。事件後、直ちにアメリカとカナダの空港は閉鎖され、世界中の空港で保安検査が厳格化。旅行客は激減し、航空会社は倒産の危機に追い込まれる。と書くと、なんだか現在の状況とよく似ているのですが、展覧会も現在と似たような状況に追い込まれるものが相次ぎました。この年は「モネ展：睡蓮の世界」という展覧会を準備しており、名古屋会場は翌年の４月開催でしたが、立ち上がりの岩手県立美術館が12月から始まる日程で、果たして海外からの作品が予定通り到着するのか、ぎりぎりまで胃が痛くなるような時を過ごしました。アメリカ国内からも何点かの作品を借用する予定だったのですが、大規模なテロの勃発で、所有者の心理は当然のことながら消極的になります。幸い、作品はすべて無事日本に到着し、展覧会も予定通り開催することができたのですが、同様の事態は2011年の東日本大震災の際にも起こっています。この時は原発事故による放射能汚染を心配した海外の所有者たちが、作品を途中で引き上げる、または貸し出しをキャンセルするという事例がいたるところで見られました。そして今回のコロナです。社会的大事件や未曽有の天災の前では、美術館はほとんどなす術もない、というのが正直なところなのですが、影響の長期化と甚大さという点でいえば、今回のコロナが最大かもしれません。当館もそうですが、すでに日本の大半の美術館で展覧会の中止や延期が発生しており、来年以降の計画にも大幅な見直しが必要な状況となっています。とりわけ海外展の場合は、欧米を中心としてコロナの感染が一向に収まる気配を見せないために、見通しが非常に立ちにくくなっています。人間同士の交流もできないような状況では、美術品の輸送などできるはずもありません。確かにデジタル通信機器の発達によりリモートでのコミュニケーションはよりスムーズになりましたが、リモートとリアルの間には、未だに何千倍、いや何万倍の情報量の差があります。コロナによる休館中、いずれの美術館もホームページ等での情報発信を積極的に展開したのですが、それはあくまでも本物と接するための準備作業に過ぎません。リモートの重要性が強調され、その機会が増えるほどに、逆にリアル（本物）の価値に気づかされる。災い転じて福となす、ではありませんが、前代未聞のコロナ禍は、モノと触れあう美術館の存在意義を改めて認識させてくれる。そう強く信じて、開館に向けて準備を進めていきたいと思います。（F）

展覧会 現在進行形

アートとめぐる はるの旅

2021年３月25日㈭～６月６日㈰

この展覧会は当初、2020年の夏に「アートで旅するなつやすみ」として開催予定でしたが、新型コロナウイルスの感染拡大により年間スケジュールを再編するなかで延期となり、長い道のりを経て、来春に開催の見込みとなりました。

本展では、名古屋市美術館の所蔵作品および寄託作品から「旅」をテーマに選りすぐって展示します。今年は自由な旅行や移動が制限されたことで、窮屈な思いをした人も多かったのではないでしょうか。楽しみがなくなってしまったなあ……という気持ちを抱いている人は、視点を変えて美術館に足を運んでみてはいかがでしょう。遠方へ行くわけではないけれど、アートは知らない世界を体験するツールになりますし、疲れた心を休めるのに、美術館は最適な場所です。美術館でアートと一緒に世界を旅しませんか……？というメッセージを送りたくて、展覧会を準備しています。

所蔵作品を活用した展覧会の重要性は、今後ますます高まりそうです。開館から32年、こつこつと作品収集を続けてきた名古屋市美術館には、現在６,500点を超える作品があります。いつも作品の近くにいる学芸員であっても、こんなに多くの作品を隅々まで覚えているわけではありません。休館期間を活用して所蔵作品を見直しながら、こんなテーマで展覧会ができそうだとか、展示機会が少ないけれどもっと紹介したい！という作品を掘り起こしたりする作業は、新鮮な発見に満ちています。

本展は、いつも常設展示室として使われている地下１階の展示室を使って開催する特別展です。常設展では、現代/フランス/メキシコ/郷土の４区分に分かれている展示室ですが、本展では垣根を取り払い、ジャンルも時代も横断的な展示を目指します。また、美術館では、作品について語り合いながら見るのも楽しみの一つですが、現在は感染対策のために対話の機会が制限されています。そのため、一人で作品を楽しめるようサポートするツールの企画にも、力を入れています。

いつもと違う動きや考え方を強いられる日々ですが、それを逆手にとってより良いものを生み出そうとする発想の転換から、新しい楽しみが生まれるかもしれません。みなさんにも、この展覧会で市美コレクションに新しい発見があることを期待しています。（haru）

ランス美術館コレクション 風景画のはじまり　コローから印象派へ

2021年４月10日㈯～６月６日㈰

フランス北東部に位置するシャンパーニュ地方の古都、ランス。2017年にランス市と名古屋市は姉妹都市提携を結び、当館とも縁の深い藤田嗣治などの名品をご紹介する「ランス美術館展」を開催しました。今回の展覧会は、前回とは少し趣向を変えて「風景画のはじまり」と題し、ランス美術館所蔵の油彩画に個人蔵の版画を加えた約80点の作品と当時の書籍資料によって、19世紀フランス風景画の展開を辿ろうとするものです。ドービニーなどバルビゾン派の画家たちや、“空の王者”と賞賛されたウジェーヌ・ブーダン、そしてモネやルノワール、ピサロなど印象派の画家たちの絵画をご紹介します。

なかでもご注目いただきたいのは、カミーユ・コロー（1796－1875）の作品です。歴史画や人物画も数多く描いた彼ですが、やはり有名なのはイタリアやフランス各地を訪ねて制作した風景画でしょう。自然のなかの木立や水辺を、“銀灰色のヴェール”と例えられる霞がかった繊細な筆触で描きだした1850年代以降の風景画は、郷愁的でロマンティックな印象を鑑賞者にもたらし、画家の生前から現在まで高い人気を誇っています。ランス美術館はそんなコローの油彩作品を27点所蔵しており、今回はそのなかから16点が展示される予定です。これだけの数のコロー作品をまとめて見られるのは、名古屋ではおそらく初めてのたいへん貴重な機会です。地中海の光のなかで踊る男女が叙情的に描かれた《イタリアのダンス》や、傾いだ木々のダイナミックな動きによって優れた対角線構図がつくり出されている《突風》など、傑作の数々にご期待ください。

現在は、展覧会のストーリーと作品の魅力を伝えるにはどうすれば良いか試行錯誤しながら展示プランを考えると同時に、皆様にご覧いただくチラシやポスターなど広報物の制作にも取りかかっています。コロナ禍で今後は海外からたくさんの作品を拝借して実現する展覧会も少なくなっていくだろうと言われるなか、当館では2019年秋に開催された「カラヴァッジョ展」以来となる、久しぶりの大規模な西洋美術の展覧会です。どうぞお楽しみに！（KK）

ジャン＝バティスト・カミーユ・コロー
《突風》1865－70年
Ivn. 899.16.23　ランス美術館蔵
©MBA Reims 2019/ photo: C. Devleeschauwer

郷土の作家たち

加藤金一郎（かとう　きんいちろう／1921－1997）

1921（大正10）年、名古屋に生まれる。独学で絵画制作を始め、1940年代前半には鬼頭鍋三郎に、また横井禮市（礼以）が開いた緑ヶ丘中央洋画研究所に学ぶ。1947年、第３回日展に初入選、同じく画家を生業とする丹羽和子と結婚。翌年、第12回新制作派協会展に初入選し、この頃から猪熊弦一郎氏、坂井範一氏に師事する。同じ頃、浜松の産婦人科医であり美術収集家でもあった内田六郎氏の知遇を得てガラス絵を始める。1952年、第16回新制作展に《白と黒の作品》で新作家賞を受賞、協友（他会派における会友と同意）となり、1962年に出品した《ある風景Ａ》《ある風景Ｂ》で同会員に推挙される。

最初期には、静物などを題材に簡略化した形態と色彩による構成を探求していたが、次第に旅先で目にした風景や国内外の祭りなどを題材にした作品を手掛けるようになる。画家の死後に発見された絵日記類をまとめた作品集『旅、旅、旅…天国もスケッチしよう』が遺族の手で発行されているが、走り書きのメモと素早い筆致によるスケッチによって旅先での印象に残った出来事が描き留められており、画家の多様な視点の在処を探ることができる。ただ油彩では、見えるものを写すように描くのではなく、主題となる街や橋などの建造物を象牙色（あるいは暗闇）の空間の中に浮かび上がらせたり、背景の空を澄んだコバルト一色に塗って象徴性を高めたり、時には題材の輪郭だけを抽出して太く力強い線の構成とするなど、実景をもとにしつつ巧みな色彩感覚と構成力によって、人々の印象に強く残る情景の創出に挑み続けた。

1977年には日本ガラス絵協会会員となり、中部ガラス絵協会を結成。一部のガラス絵作品は浜松市美術館に所蔵され、同館で1983年、1987年、1990年に開催された「今日のガラス絵」展に出品、近年では「ガラス絵　幻惑の200年史」展（2016.12.23～2017.２.26、府中市美術館）で紹介された。風景の会には1986年の結成記念展から亡くなるまで、会員として出品を続けた。（３）

加藤金一郎《静物》1950年　名古屋市美術館蔵

川崎昂（かわさき　たかし／1914－2005）
山本良比古（やまもと　よしひこ／1948－2020）

山本良比古は、1948（昭和23）年に名古屋市西区に生まれた。知的、聴覚、言語に障害がある。名古屋市立庄内小学校を経て、1961（昭和36）年に名古屋市立菊井中学校特殊学級に入級する。担任の川崎昂は、1952（昭和27）年の開設時から特殊学級を担当し、試行錯誤のなかから図工教育を重視した指導を行っていた。山本は、川崎の指導と支援を受けながら造形活動に取り組み、学外の美術展に入選するまでになる。

川崎は勤務を続けながら1963（昭和38）年に義務教育を終えた知的障害のある子どもを受け入れる無認可作業所を設立し、山本は1964（昭和39）年に中学校を卒業するとともに入所して、川崎のもとで制作を続けている。1969（昭和44）年に職を辞した川崎は、社会福祉法人を開設し、主にその場において山本の制作を支援し続け、死去後は次男の純夫が山本の支援を行っている。

山本の初個展は1965（昭和40）年に名古屋の丸栄百貨店で開催されている。以来、知的障害のある作者であることが「第二の山下清」などの評言とともにマスコミを通して紹介され、海外を含めて各地で個展が開催されている。近年は、「ふれあいアート展」（主催:一般社団法人愛知県知的障害児者サポート協会）など、障害のある人の作品を紹介する展覧会に出品されている。2019（令和元）年には、高浜市やきものの里かわら美術館が「山本良比古－緻密な風景を描いた“虹の絵師”」（会期：2019年９月28日－12月26日）を企画し、美術館を会場とするはじめての個展を開催するとともに、川崎と山本の活動が福祉の領域にとどまるものではないことを指摘した。

混色ができない山本は、目にした光景を、あらかじめ用意された多数の色ごとに細やかな点描にして描く。きっかけを与えられて始まる山本の制作は、川崎などのまわりの人の気づきや工夫にも支えられている。美術を通しての人間形成を実践した川崎の活動は、山本の画業とともに美術教育の観点からも地域の美術の歴史のなかに記録されるべきものである。（み。）

山本良比古《イタリア・ミラノ・ドゥオモ聖堂》1982年
社会福祉法人あいち清光会障害者支援施設サンフレンド蔵

どこがおもしろい?!

丹羽和子《人と人との対話》1963年

油彩、和紙コラージュ・キャンヴァス　162.0×131.0㎝

今回は、丹羽和子（1924－2014）の《人と人との対話》（1963年）を取り上げます。ランス美術館展と同時開催していた名品コレクション展Ⅱ（2017年10月７日から12月３日まで）の期間中、来館者の皆さんから寄せられたコメントを紹介します。

「２羽の鳥が向かいあって、にらめっこしている？ように見えました。巨大な頭、巨大な目に比べ、足はとても小さく、まるでおもちゃのようです。」（ともひとさん、44歳）

「向かって右下にいる人（？）がぞうだと思った。最初人には見えなかったけど、なんとなくは…。心の中の黒い部分が出てるのかな？じっと見たら手があった‼　しかし４本しか指がないね…」（こももさん、13歳）

「人と人、にもみえるし、対話による震動とか温度の変化とか、試行錯誤とか…そんなものを表したのかな？ジグザグとか渦巻きとかがコトバなのか、コトバはなくてよいのか??」（匿名、43歳）

「左右の黒いものが人だとすると、目や皮ふなどが書かれていない。その人の個性や考えや思いなど人の内面が書かれていると思う。コミュニケーションで重要なのは外見や表面上の言葉でなく、本心や個性など内面であると思った。」（H.K.さん、23歳）

「絵とタイトルがぴったりの作品と感じました。会話をしていてもかみあわないところや、相手に伝わってない部分。しかしわかりあっているところもないわけではない。その時のその人の気持ちや状態によっても同じ会話でもなり立つ時とすれ違ってしまうこともある。目や口や内臓もその会話によって動きや働きがばらばらになっている。」（マキゴンさん、56歳）

「人の心の奥、ずっと深い深い部分が伝わってくるような印象です。赤色が目に飛びこんでくるけど、よくよく見ると黒っぽい赤黒い色使いとすきまの青色があわさってふくざつな気持ちがありそうな感じです。一筋縄ではいかなそうな２人の対話…でもなんだかんだでわかりあっているのかも‼」（ひまわりさん、25歳）

「一人は目が大きくて、もう一人は歯が出ているようだったので話している人と見ている（きいている）人に見えました。話している人の手が１つあったので『ちょっときいてよ』というぐちを言う動作に思え、もう一方は２つ手があるので『やめてほしい』という拒否をしている動作に思えました。色合いが暗め？ だと思ったので楽しそうより、人間の怖い部分が出ていそうな印象でした。」（さちこさん、22歳）

「恐くて訳が分からない、その中で必死に手をのばして行うのが対話なのだ、と思う。人と人はお互い分かり合えない、その恐ろしさを表現した作品であると感じた。」（すなねこさん、22歳）

「二人の人物が対話している絵、ですが、口から出ているのが『タテマエ』で、胸のあたりから出ているものが『本音』を表した絵のように感じました。またお腹のあたりが左の人はドス黒いことから何かやましいことを考え、右の人物は青・赤黒と感情の多彩な人なのかと感じました。それでも手や脳波？ のようなものでつながろうとしているのは、人と人とのつながりは対話によって、意思疎通をすることで、理解し合えるということを示しているのかな、と感じました。」（K・Nさん、21歳）

「嫁と姑のもやもや感のある対話にみえました（自分のおかれている立場なので）。世代が離れているので、対話しても分かりえない部分と、対話しないと分からない部分と、つかず離れず模索の毎日です。下の方の手がからみあっているのが友好的、求めあっている安心感があります。」（ヨーコさん、42歳）

「『対話ってなんだろう、人と話すことってなんだろう』自分の意思を伝えること以上の何かを求めれば求めるほど、絶望感が募る。頭で理解する以上の話がしたい。それは血かもしれない。内臓かもしれない。そもそも無理なのかもしれませんね。」（なべさん、42歳）

以前、本紙96号（2014年夏号）「郷土の作家たち」でも紹介しましたが、丹羽和子は夫である洋画家の加藤金一郎とともに新制作協会で活躍した当地ゆかりの画家です。60年近く前に描かれた作品ですが、人が生きていく上で抱える普遍的な悩みをテーマにしているからか、ご覧になる個々人の経験や考えがコメントに色濃く現れているように感じました。否応なく身体的距離の確保が求められ、自由な往来や他者との心身両面における距離感が模索されるコロナ禍の今、最後の方の『対話ってなんだろう、人と話すことってなんだろう』という素朴な問いをくり返し考えずにはいられません。（３）

新収蔵品紹介

藤田嗣治作、２点の新収蔵品について

昨年６月、名古屋市内の個人および企業から藤田嗣治の作品２点をご寄贈いただきました。《二人の祈り》と《夢》という、いずれも藤田の芸術を語る際には欠くことのできない、戦後期を代表する名品です。2016年に当館で開催した「藤田嗣治展」の際にもお借りし、所蔵者の方もよく存じ上げていたのですが、まさかご寄贈をいただけるとは夢にも思わず、突然のお話に驚くと同時に大変感激いたしました。２点とも藤田が1968年に亡くなった後も、君代夫人の手元に最後まで残されていた愛蔵の品です。とりわけ《二人の祈り》は、晩年の藤田夫妻が暮らしたパリの自宅の居間に飾られた写真が何枚も残っており、夫妻が格別の思いを寄せた作品であることがわかります。この作品が描かれたのは1952年。戦争責任の問題に翻弄され、追われるようにして日本を後にしてから３年。アメリカを経由してパリに到着してからでも２年の時間しか経っていません。聖母子に祈りを捧げる藤田夫妻は、天使とおぼしき子どもたちとともに雲の上にあり、下界の闇には妖しい魑魅魍魎がうごめいています。俗世間の煩わしさから逃れ、天上の清らかな世界で心安らげたいと願う当時の夫妻の心情が画面から読み取れます。この７年後、二人はランス大聖堂でカトリックの洗礼を受けています。

藤田嗣治《夢》1954年
©Foundation Foujita/ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2020 E3883

もう一点の《夢》は、藤田の十八番（おはこ）ともいえる裸婦を描いた作品です。「ジュイ布」と呼ばれる、細かなプリント柄の更紗布で覆われた天蓋の下に眠る裸婦を、闇の中から動物たちが見つめています。彼らは裸婦の夢の中に登場する存在なのでしょうか。ほとんどモノクロームに近い画面でありながら、優美と豪奢にあふれた作者会心の一点です。

今回の２点を加えて、当館の藤田コレクションは６点となり、時代的にも画家の全貌を見渡せる内容となりました。どうぞ常設展示室で、その精緻で華麗な絵画世界をご堪能いただきたいと思います。（F）

藤田嗣治《二人の祈り》1952年
©Foundation Foujita/ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2020 E3883

イベントガイド

美術館は2021年１月５日㈫より開館します

新型コロナウイルス感染症の拡大および改修工事のため、当館は2020年３月２日㈪より休館が続いていましたが、2021年１月５日㈫より開館し、以下のとおり展覧会と講演会を開催します（詳細は順次当館公式サイトに掲載します）。

■常設展 名品コレクション展Ⅰ

会期：１月５日㈫～３月14日㈰

＊２月４日㈭、２月５日㈮は休館し、一部展示替えを行います

■特別展「写真の都」物語
―名古屋写真運動史：1911－1972―

会期：２月６日㈯～３月28日㈰

【関連催事】

○解説会

①２月20日㈯「芸術写真を超えて－〈愛友写真倶楽部〉の内外」

②３月６日㈯「前衛写真から主観主義写真へ－写真家たちの戦前／戦後」

③３月20日（土・祝）「東松照明と〈中部学生写真連盟〉」

いずれも14：00から、２階講堂、定員90名（入場無料、先着順）

講師：竹葉丈（当館学芸員）

■特別展 アートとめぐる はるの旅

会期：３月25日㈭～６月６日㈰

＊地下１階常設展示室で開催

■コレクション解析学

当館のコレクションから１点を選び、その魅力を学芸員が紹介する講座です。

２月21日㈰　14：00～15：30、２階講堂、定員90名（入場無料、先着順）

演題：「芥川賞作家の画業」

作品：冨澤有爲男《姉》1928年

講師：保崎裕徳（当館学芸係長）

休館日：月曜日（祝休日の場合は開館し、翌平日休館）、２月４日㈭、２月５日㈮

展評

2020年７月18日㈯～９月13日㈰
徳川美術館

漆ー徳川美術館珠玉の名品

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、今年は４月に入ると大半の美術館、画廊、ギャラリーは長期休業となり、作品を直に見る機会がなくなった。ようやく美術館が再開し、展示室で久しぶりにその機会を得たとき、作品を前にして気持ちがワクワクしていることに気づき、新鮮な体験をした。

そうした展示の一つに「漆ー徳川美術館珠玉の名品」がある。「繊細で美麗な意匠」とキャッチが添えられていたが、徳川美術館が所蔵する唐物漆器を中心に名品が展示されていた。徳川美術館の漆芸品としてまず浮かぶのは「初音蒔絵調度」（国宝）である。３代将軍徳川家光の長女・千代姫が数え年３歳で嫁いだときに持参した婚礼調度で、『源氏物語』の「初音」の雅な世界が描かれている。さまざまな蒔絵技法で装飾されている調度品は、終日見ていても飽きないことから「日暮らしの調度」と呼ばれている。選ばれた数点の展示でも、目にするといつもため息が出る。

展覧会では日本、中国、朝鮮、そして琉球の漆器があわせて120点ほど展示されていた。中でも心躍ったのが琉球漆器の16ー17世紀につくられた《朱漆地花鳥七宝繁文密蛇絵沈金大椀》（重要文化財）（図）だ。解説によると「本品は御供飯（ごくはん）と呼ばれる神饌（しんせん）用の食器の中央に据えられる大椀」で、濃い朱の地に赤い花をつける椿、尾長鳥が描かれ、蝶、蜻蛉も施されている。つくり手の苦心に思いをはせながら、華やかな世界にしばらく引き込まれた。

このたびは長年にわたり伝えられてきた作品を前にし、その作品に宿る芸術性と技術の奥深さに感服し、感性が刺激されていることにあらためて気づいた。感染症拡大防止から期せずして作品を久しぶりに見ることになり、自分の感性のあり方を見つめ直していることを実感した。そして、直に作品を見る機会の大切さが身に染みることになった。（I.）

重要文化財《朱漆地花鳥七宝繁文密蛇絵沈金大椀》
琉球　16ー17世紀　徳川美術館蔵

展評

2020年８月２日㈰～９月27日㈰
極小美術館

片岡美保香展

一見して、シュールな世界だと感じる画風である。20世紀初頭のメキシコで活躍したシュルレアリストにフリーダ・カーロやマリア・イスキエルドといった女性の画家たちがいるが、片岡美保香の作品は、ちょうど彼女たちの絵の醸し出す摩訶不思議な雰囲気を想起させるようだ。そして、人物像には一様に顔が表現されず、そのことが余計に現実離れしたイメージをもたらしている。

今回展示された作品は、全て札幌にあるイサム・ノグチのモエレ沼公園を題材にしているという。そこにある遊具やモニュメントを上手く利用して彼女の発想を加え、現実にある場所をシュールな場所へと変容させている。モエレ沼公園は、「大地を彫刻した男」と言われるイサム・ノグチのダイナミックな世界観を表しているが、そこに配されるモニュメント等はシンプルで端正、シュルレアリスムの世界とはかけ離れているように感じられる。それだけに、絵の中でその場所を違った世界に変えてしまったこの画家のセンスを面白く思った。

同じ少女が３人、手前から奥へ向かっていくところを描いた《探さないで》という作品では、遠ざかる少女がそれぞれ鑑賞者から見て違う距離にあり、時間軸のズレを感じさせる。また、金属のモニュメントと人物を組み合わせた作品では、モティーフを見る方向が左右でズレている。こういった時間や空間の歪みという観点は、近代から現代へと変わりゆく絵画が追いかけてきたものでもある。その問題意識は現代の片岡にも受け継がれているのだろう。

フリーダ・カーロは周囲から「シュルレアリスムの画家」と称されたが、自分自身は必ずしもそうは思っていなかったようである。片岡の作品も「シュルレアリスム」と一括りにすることは出来ないし、本人もそうは意識していないようであった。とはいえ、そこに繰り広げられる不思議な世界が我々を現実から離れた世界に一時連れて行ってくれることは確かであり、そこに絵画というものの醍醐味もあるといえるのだろう。（AN）

片岡美保香《探さないで》2020年

BOOK

『アルフォンス・ミュシャの世界 ２つのおとぎの国への旅』

（解説・監修 海野弘、パイ インターナショナル、2016年）

当館では2020年４月25日～６月28日、「みんなのミュシャ　ミュシャからマンガへ一線の魔術」と題したミュシャ展を開催する予定でしたが、新型コロナウィルス拡散が心配されたため、名古屋会場はやむなく中止する運びとなってしまいました。真っ先に中止が決まったのは、講演会やコンサートなどの展覧会に付随する催事でした。この書籍の解説・監修を行っている海野弘さんには、ご講演をお願いしており、「ミュシャの三つの時代ー世紀末、1970年代、現代」というタイトルで、現代まで続くミュシャの影響についてもお話しいただく予定でした。講演会は大変興味深く、期待されるものだっただけに、残念な思いがしました。

さて、その海野弘さんの著書ですが、まず、タイトルがとても魅力的であり、表紙の煌びやかな装丁にも眼を奪われます。タイトルに「２つのおとぎの国」とあるのは、ミュシャが最も活躍し、ミュシャ様式を流行らせたフランス、そしてミュシャが生涯愛した故郷のチェコという２つの国を表しています。「２つのおとぎの国」での活動を軸に、様々なミュシャの仕事を豊富で大きめの図版、明快な解説によって網羅しています。ミュシャについて知りたければ、この１冊でかなり充実した知識を得ることができそうです。そして、本を開けば、すべてのページが美しくデザインされていることに気づきます。

電子書籍が普及する今日でも、この本のように装丁やデザインに凝った「モノ」としての本は、手にすることの喜びを与えてくれます。本のデザインにも才能を発揮し、その美しい装飾で彩ったミュシャですから、彼についての本も、美しく。そんな制作者の熱意を感じさせてくれる書籍です。（AN）

展評

2020年８月22日㈯～９月13日㈰
Gallery芽楽

柴田麻衣　make-or-break

柴田麻衣は1979年愛知県生まれ。大画面のパネルに、レイヤーを意識した画面構成で具象的なモチーフが描かれ、実在しない風景のような不思議な空間が作りだされる。

作家の近年の特徴として挙げられるのは、世界各地の様々な時代における、文化の消滅や歴史の加害性を主題とすることだ。例えばギャラリー入口正面に展示された新作《Whereabouts of the signature》に描き込まれたのは、ナチスに追われたユダヤ人オーケストラのメンバーの名前が書かれた荷物タグである。個人の名前が顧みられることなく人数がカウントされ続けるコロナ禍を契機として、この古い荷物タグとそのストーリーに出会った記憶が引き出され、今回の作品の構想が生まれた。

興味深いのは、時に重苦しい政治的・社会的主題が扱われる一方で、スカーフや布のヴェールなどのモチーフによって風が表現され、軽やかさや躍動感をもったリズムが画面空間内に作り出される点である。また、それらのモチーフは景色を透けて見せたり、あるいは部分的に覆い隠したりもする。これらによって鑑賞者は、奥行きを暗示された画面内の風景に入り込むのではなく、距離感を保ちながら覗くような感覚をおぼえる。

「版画をつくるようなつもりで絵画を描いている」と語る作家は、名古屋芸術大学で版画を学び、エンボス加工を用いる銅版画や、複数のアクリル板とシリコンによる立体的な平面作品も手がけていた。そこに通底する造形的な関心は、平面のなかにレイヤーを作り出すというものだろう。構想を十分に練り、マスキングテープなどを用いて計画的に色を重ねていく版画的な工程を経て、透明感をもった薄さと多層的な奥行きが併存する絵画が出来上がっている。

分断が深まる情報化社会のなかで、現在につながる文化・歴史の多面性に真摯に向き合いつつ、多層性をもつ画面空間を通じて（エネルギッシュな表現で声高に主張するのではなく）密やかに語りかけるように訴える絵画だと感じた。（KK）

柴田麻衣《Whereabouts of the signature》2020年　各130.3×130.3㎝

CULTURE, MOVIE, DRAMA&MUSIC

学生運動とビラの時代

今年の３月以来、「コロナ禍」と改修工事により永らく休館を続けてきた名古屋市美術館ですが、前々号、前号でご紹介したとおり、工事終了に伴う休館明けの特別展として、地元名古屋の写真表現史を辿る「「写真の都」物語ー名古屋写真運動史1911-1972ー」を開催する予定です。“満を持して”と申し上げたいところですが、作家や資料の調査を進めるうちに、いつもながらの“泥縄”式に嵌りつつあります。今回の調査段階で面白かったのは、1968年、つまり学生運動のピークに向かう学生写真の動向です。1952年に名古屋出身の写真家東松照明によって組織、結成された全国の大学の写真サークルの初めての横断的組織〈全日本学生写真連盟（全日）〉が大きく変貌したのが1965年に当たります。

それまでは、各大学の写真サークルが独自のテーマを決め、メンバー全員でそれに沿って撮影し、「組み写真」として大学祭などで発表するといったことが主流でした。そうした中で、〈明治大学カメラクラブ〉と写真評論家の福島辰夫は、サークル活動の刷新と全日のキャンペーンを全国規模の運動として展開することを目指し、写真集『足ぶみ飛行機』と『状況1965』を制作・発行します。これらの写真集は、新たな表現を提示したり技法を解説したりしたものではなく、むしろサークル活動の進め方の具体的な実例を示すものでした。ただ、そのことが逆に全国の大学ならびに高校の写真部に受け入れられました。

全日の代表部は、連盟の会報を『YOUNG EYES』と改称し、小冊子からタブロイド判の新聞へとその体裁を変えました。やがて、紙面に踊る表現も「呼びかけ」から「アジテーション」へと展開して行きます。改訂直後の第55号（1966年４月17日発行）では、「私たちと写真」と言う穏健だった言い回しが、翌第56号（1966年７月２日発行）では、「キャンペーンに参加しよう」という呼びかけに、第58号（1967年２月22日発行）に至っては、「今、われわれの眼前に位置づけなければならない問題とは何か」という具合に次第に急進的な提言へと進化していきます。

「運動」とか「斗争」、「連帯」や「団交」といった、1968年という大きなうねりに向かう、当時のスローガンにはなぜかビラが良く似合います。今ではLINEで誰ともつながり、集まることもできるのでしょうが、ティッシュもない当時の粗悪な紙の手触り感には、学生たちが伝えあった純真な思い込みと情熱すら感じ取れます。

誌面の下段には学生写真運動のスポンサーであったフィルム・メーカーの広告が掲載されています。モデルに登用されていた女優加賀まりこの、現在とさほど変わらないコケティッシュな表情が、そのことを強く印象づけます。（J.T.）

『全日会報　YOUNG EYES』第56号
（1966年７月２日、全日本学生写真連盟発行）　三面

【編集後記】

この原稿を書いているのは、マスク越しにも濃厚な金木犀の香りを感じる10月下旬。改修工事にともなう休館に応じて、今回の紙面構成には少し変更がありました。このたび休載させていただいたのは、展覧会への皆様の感想をご紹介する「感想ノートから」、そして協力会の活動や展覧会関連イベントの様子をご報告する「協力会通信／イベントレビュー」です。代わりに「展覧会進行形」を２枠用意し、また新しい試みとして令和元年度の収集作品をご紹介する「新収蔵品紹介」を設けました。

ここでは藤田嗣治の作品についてご紹介しましたが、他にまとまってご寄贈いただいた資料として、赤瀬川原平の「千円札裁判関係資料」273点が挙げられます。資料には裁判記録や証拠押収品も含まれており、いずれも当時の様子をうかがい知ることができる貴重なものです。“模型”千円札をめぐる裁判では、法廷を舞台にさまざまなパフォーマンスが行われており、周囲の言説まで含めてひとつの作品とみなせます。今回の収集資料は記録としてのアーカイブでありながら同時に、当時の作品を再び起動させるための装置としても捉えられるでしょう。

美術作品は制作当時を内在させながらも私たちの現在と呼応する、タイムカプセルのような役割を果たせるのではないでしょうか。名古屋市美術館が所蔵する作品群を、「今、ここ」の文脈にどのように接続させて紹介していくべきだろうかと、ニュースを見ながら考えさせられる日々が続いています。（KK）

アートペーパー第115号 発行日：2020年12月１日
発行 名古屋市美術館
［芸術と科学の杜・白川公園内］
http://www.art-museum.city.nagoya.jp/
〒460-0008
名古屋市中区栄二丁目17番25号
地下鉄《伏見駅・大須観音駅・矢場町駅》下車
Tel.052-212-0001 Fax.052-212-0005
休 館 日：毎週月曜日（祝休日の場合は翌平日）
年末年始
開館時間：午前９時30分～午後５時
祝日を除く金曜日は午後８時まで
※入場は閉館の30分前まで
Nagoya City Art Museum

執筆者／深谷克典（F）、井口智子（I.）、保崎裕徳（nori）、竹葉丈（J.T.）、角田美奈子（み。）、中村暁子（AN）、清家三智（3）、森本陽香（haru）、勝田琴絵（KK）